文化財をたずねて

No.14

発行　赤穂市教育委員会
編集　生涯学習課文化財係
（赤穂市加里屋81　TEL 43-6962）

塩屋地区の文化財めぐり（平地編）

塩屋地区は、千種川と大津川などから運ばれてきた土砂が堆積してできた沖積地（平地）と、その後背山地からなりたっている。平地が形成され始めたのは古代以降のことであり、それ以前は山際まで海岸線が迫っていた。山際近くにある塩屋・築田遺跡などから縄文時代の遺物が出土しており、この頃から人々が生活しはじめた。古代には、海岸線が現在の国道250号より南方まで下がり、平地は東大寺領石塩生荘として製塩などが行われた。阿弥陀堂境内の地下からは平安～鎌倉時代にかけての貝塚が見つかっており、阿弥陀堂周辺が海岸であったことがわかる。現在の東・西大道にあたる備前街道は、室町時代には整備されていたようである。その道は、赤穂城下町西惣門を抜けて、花岳寺に至る。近世には新規塩田の開発が相次ぎ、赤穂塩業の一大中心地となった。また、柴原家が急成長して塩屋村大庄屋となり、赤穂藩蔵元役にも就任している。現在も旧塩屋村周辺は古い町屋が軒を並べて連なっており、古式ゆかしい風情を醸し出している。

①赤穂城下町西惣門跡

①赤穂城下町西惣門跡

備前街道より赤穂城下へ入る西の迎え門であり、枡形が築かれ番所が配置されていた。その門の一部は、明治4年（1871）に花岳寺住職仙珪和尚が買収後花岳寺の山門として移築し、平成元年（1988）に市指定文化財となっている。

②六百目

昔からの度重なる水害により肥沃な土が1丈（約3ｍ）程度堆積したため、1反に600匁（六百目）も出さないと買えないほど値打ちのある上田になったと言われたことから呼称されている。

③道標

③道標

赤穂城下町西惣門から阿弥陀堂までを広道というが、広道と村中小道への分岐点に「右びぜん道」と刻まれた道標がある。花崗岩製で、高さ約70㎝を測る。

④柴原本家（浜野屋）屋敷跡

柴原家は、尾崎村より元和6年（1620）に移住してきた。赤穂屈指の塩田主・豪商となり、赤穂藩（森家時代）の蔵元役、塩屋村大庄屋を務めた。文化年間（1804～1818）には田畑23町余（約23ha）、塩田28町余（約28ha）、屋敷3反1畝余（約3,100㎡）、大坂掛屋敷3軒、その他数えきれない程の借家を所有していた。

⑤阿弥陀堂

⑤阿弥陀堂

嘉吉2年（1442）、西有年の六道山遍照院よりこの地に移ったと縁起に記されている。本尊は阿弥陀如来であり、他に親鸞上人画像・薬師如来立像・観音菩薩坐像を安置している。境内には、享保5年（1720）有年村との入山権を巡る山論事件で、強訴により打首となった3人を祀った地蔵堂をはじめ、村のために悪党を取り押え亡くなった宇田勝平の墓や山火事の消火中に殉職した八木一治郎の墓、98名の名を刻んだコレラの碑、芭蕉の句碑などがある。また本堂改築の際、平安～鎌倉時代の貝塚が確認されている。

⑥小橋川の洗い場の石

⑧かんにん橋

⑥小橋川の洗い場の石

旧塩屋村の北辺には、近代上水道が設置されるまで戸島用水から引いた小橋川に、長さ約30 mにわたる石造りの洗い場があった。上流から順に、水汲み場・米や野菜の洗い場・洗濯場・おしめ洗い場・牛馬洗い場が並んでいたと言われる。小橋川が暗渠となる際に、現在地に移された。

⑦赤穂実科女学校発祥地

明治45年(1912)、塩屋村他5カ町村の組合立赤穂実科女学校が創立され、袴姿の女学生が通っていた。この地には当初、塩屋尋常小学校が置かれ、次に赤穂実科女学校、塩屋村役場、塩屋保育所となり、現在は公園及び屋台格納庫となっている。

⑧かんにん橋

小橋川に架けられていたが、道路工事の際、現在地に移された。長さ約140 cm、幅約70 cmを測る。石橋の側面の一方には「堪忍橋」、もう一方には「かんにんばし」と刻まれている。正月屋と言われる大家が衰退したが、逆境に耐えて「堪忍、かんにん」と働き、家を再興させたという話が残されている。

⑨塩屋村会所跡・道路元標

江戸時代に、塩屋役人の詰所として使用されていた。また、町村間の距離を測るための起点となる道路元標が、跡地公園に接して建てられている。

⑨塩屋村会所跡・道路元標

⑩遍照山真光寺

浄土真宗西本願寺派に属し、僧善明が創建した。永正3年（1506）、西有年の六道山遍照院よりこの地に移ったとされる。山門（東表門）は、立派な雄龍雌龍の彫り物のある四脚門である。

⑪西の観音様

塩屋北畔の九右衛門が、夢のお告げから海中より光明を放つ観音様を拾い上げ、観音堂を建立したと言われる。火事の多かった文政13年（1830）には、御心を鎮めたいと住民が会所へ嘆願し、銀30匁を下付された。現在は、塩屋西集会所に安置されている。

⑬水筋井戸番地蔵

⑫木戸の口跡

江戸時代には、塩屋村へ出入りする木戸門があったと言われ、治安維持のために出入りする者を見張っていた場所である。

⑬水筋井戸番地蔵

塩屋では最小の地蔵菩薩が、5体安置されている。塩屋浜ん台の善右衛門が良質の飲料水を得るため様々な場所を掘削し、慶応3年（1867）、井戸をこの地に掘り当てることができた。その感謝のしるしと、水が枯れないようにとの願いを込め、井戸の守り本尊として祀ったのがこの地蔵であると言う。地蔵が安置されている傍らには石枠で組まれた井戸が残されており、現在でも清水が湧き出ている。

⑭看護婦殉職供養塔

⑭看護婦殉職供養塔

明治12年（1879）の悲惨なコレラ禍の後、村立の避病院が建てられ、大正初期のチフス流行の折には、2人の看護婦が感染し命を落とした。その後、平成3年（1991）になり、地域の人々の善意によって墓石が供養塔として祀られることとなった。

⑯若宮神社跡

⑮長尾の池跡

長さ13間半（約27ｍ）、幅14間半（約29ｍ）の池があったとされる。近くの処刑場の打首をこの池で洗ったとの伝承が残る。また、この池は赤味を帯び日に7度も色を変えたので「七色の池」「うらみの池」と言われることもあった。（『赤穂の昔話』第2集）

⑯若宮神社跡

京都若宮神社の分霊を勧請して祀られていたが、明治42年（1909）荒神社に合祀された。神社のあった当時、7月15日に行われていた祭礼には道路沿いに露店が並び、力相撲も行われて10人抜きの力持ちが出た年もあり、大いに賑わった。

⑰塩屋の大地蔵

⑰塩屋の大地蔵

台座までを含めると1.63ｍあり、塩屋では最大のものである。元は名崎の三昧（火葬場）にあったが、赤穂市斎場設立の後、現在地に移された。寛保2年（1742）に領内で270人が死ぬという流行病が発生し、塩屋村でも数多くの犠牲者が出た。病魔の退散と死者の霊を慰めるため、大地蔵の建立を赤穂藩に願い出たが、藩は塩屋村住民の願いをすぐには認めず、35年後の安永6年（1777）にようやく許しが出て建てられた。

⑳金時さんの足跡

㉒ハブ池地蔵・お俊の墓

㉓塩硝蔵跡

㉔げんじょの岩

㉕荒神社

⑱三本松

明治25年（1892）の洪水の際、現在地付近で3本の松の株が見つかった。後に河川改修工事の際、記念碑とともに植えられた。

⑲塩屋・築田遺跡

塩屋川改修の際、縄文土器片と中世以降の木樋2本などが出土している。

⑳金時さんの足跡

脇石の上面に残る窪みには、旅行好きの金時さんが小豆島から海を跳び越え、片足はこの石にもう一方の片足は高山についたと言う昔語が伝えられている。（『赤穂の昔話』第1集）

㉑西山貝塚

西山の西山裾において鎌倉・室町時代の土器や貝殻などが出土している。

㉒ハブ池地蔵・お俊の墓

ハブ池南側のほとりに、1体の地蔵と、お俊の墓と呼ばれる墓碑がある。地蔵には天保11年（1840）の銘が刻まれており、溺死者供養のために建立されたと伝えられる。その頃ハブ池は子供達の水遊びの場所であったが、ある日不幸なことに1人の子供が深みにはまり溺れ死ぬという事故が起きた。池の持ち主であった正月屋の当主は、その子供の死を悲しみ、供養する目的で建立したと言う。

また、明治の末頃お俊は正月屋の奉公人であったが、父親が急病との知らせを受け山道を家へと急いだ途中で、暴漢に襲われ殺されてしまった。昭和の頃、墓が一つだけ山上にあるのは可哀相であると考えた村人が、地蔵の横に移したものであると言う。

㉓塩硝蔵跡・塩硝蔵番小屋

森家時代、鉄砲の火薬を作る塩硝蔵（火薬庫）が建てられていた。はたき蔵といわれる瓦葺4間（約8ｍ）2間（約4ｍ）の作業蔵と、瓦葺3間（約6ｍ）2間（約4ｍ）の火薬庫が建てられ、その上には火事に備えて池が造られていた。また、現在は高さ約2ｍの石垣上に、幅約30ｍ、奥行約15ｍの平地だけが残っている。また、蔵の上手と下手には藁葺の番小屋が置かれていたが、現在は農家の納屋となって1軒残るだけである。

㉔げんじょの岩

荒神社の裏山にあり、高さ約2.5mを測る花崗岩である。兵隊ごっこの陣地取りの遊び岩として、古くから地域の人々に親しまれていた。また、付近は見晴らしもよく、節句には家族で弁当をもって遊んだと言う。

㉕荒神社

創立年月は不詳であるが、皇極天皇の頃（7世紀中頃）秦河勝が素盞嗚尊を勧進し創建したと伝えられる。延宝3年（1675）、正徳5年（1715）、寛政12年（1800）の棟札に再建・修復が行われた記述がある。別称「正面さん」と言われ、明治42年（1909）には若宮社・金毘羅社・塩釜社を合祀した。境内には、市内で比較的古い廻船絵馬が奉納されている。秋祭りには2台の大屋台が出て、境内で屋台を練る勇壮さはかつての西浜塩田で働いていた浜男達のたくましさと塩屋の伝統を窺わせる。獅子の舞う様も他にない勇ましいものである。

（調査協力：長棟三枝、西中正次郎、森津庸子）